弘前医療福祉大学紀要　6(1), 111 − 120, 2015

〔特 別 枠〕

「少年倶楽部」名編集長・加藤謙一と流行作家・佐藤紅緑との運命的な出会い

齋藤三千政 [1)]

要　　旨

富田尋常小学校の青年教師だった加藤謙一が、自らの手で学級雑誌「なかよし」を発行したところ、子どもたちが非常に喜んだ。その喜ぶ姿に意を強くし、自分のクラスの子どもたちだけではなく、全国の子どもたちを喜ばせたいとの夢を追いかける。そして、出版社への入社を決意し上京する。この決意が佐藤紅緑との〈運命的な出会い〉の遠因となった。しかし、子どもたちと泣きの別れをしたにもかかわらず、その夢の実現には厳しい現実が待っていた。やっとのことで加藤謙一は講談社へ入社することができた。のちに雑誌「少年倶楽部」の名編集長という高い評価を得ることになる。

一方、佐藤紅緑は明治末期に小説、脚本で文壇から注目され、大正期には流行作家としてその地位を確立する。その加藤謙一と佐藤紅緑が大正時代末期に出会うことになる。ともに弘前出身で、謙一の父と紅緑は知己の間柄であったことから、加藤が紅緑に「少年倶楽部」への原稿を依頼した。ところが、紅緑は烈火のごとく激怒した。だが、加藤の必死の説得が功を奏し、紅緑の原稿が届く。この二人の出会いが、日本の雑誌界に衝撃を与えることになった。すなわち、「少年倶楽部」の昭和２年５月号から、紅緑が「あゝ玉杯に花うけて」の連載を開始するやいなや、全国の少年たちは興奮の坩堝と化したのである。親たちや先生方からも絶賛の声が上がった。この作品が連載中に「少年倶楽部」の売り上げは、じつに30万部から45万部へ跳ね上がったというのだ。佐藤紅緑は少年小説によって一世を風靡し、児童文学の世界に金字塔を打ち立てた、と評価されたのである。

キーワード：夢、出会い、少年倶楽部

Ⅰ．はじめに

加藤謙一は、大正10年に講談社の雑誌「少年倶楽部」の５代目編集長に抜擢される。のちにそのすぐれた編集力、企画力で名編集長という称号を得ることになる。また、佐藤紅緑は明治末期に小説、脚本で文壇から注目され、大正期に作家としての地位を確立した流行作家であった。その加藤謙一と佐藤紅緑との、いうならば〈運命的な出会い〉を、小稿の主たる標的とする。すなわち、「少年倶楽部」の昭和２年５月号から、佐藤紅緑が「あゝ玉杯に花うけて」の連載を開始するに至った、そのプロセスとその作品が圧倒的な支持を得たことの秘密に迫ろうとするものである。まずは加藤謙一の略歴を記しておきたい。なお、のちにも触れるが、加藤謙一には〈自筆年譜〉があるから、それを参照しながら以下に略述する。

1896（明治29）年５月28日、青森県中津軽郡和徳村大字和徳字稲田９番地（のちに弘前市）に、父忠吉、母ふさの長男として生まれる。明治37年、第二大成尋常小学校へ入学。第一弘前高等小学校を経て、同42年、青森県立弘前中学校（現弘前高等学校）へ、親友の宇野親義（ちかよし）とともに入学する。なお石坂洋次郎は４年後輩である。大正３年、卒業後、藤代村三省尋常小学校の代用教員。翌年、青森県師範学校二部へ。同６年、富田尋常小学校の訓導。学級雑誌「なかよし」を発行する。

大正７年、上京するも雑誌社への入社決まらず、都内で代用教員を続ける。同10年、大日本雄弁会講談社入社。以後、「少年倶楽部」編集長として活躍する。昭和20年、終戦と同時に講談社を辞任する。同22年、尚文館を設立し「野球少年」を発行。同23年、学童社を設立し「漫画少年」を創刊。なお加藤謙一の四男丈夫（現

1）弘前医療福祉大学医療技術学科言語聴覚学専攻（〒 036-8102 弘前市小比内 3-18-1）

独立行政法人国立公文書館長）は、この「漫画少年」が、昨今の世界的な「マンガ」「アニメ」ブームのルーツである、とのまことに興味深い論を展開している[1)]。また、2002年には『「漫画少年」物語　編集者・加藤謙一伝』[2)]を刊行している。その著書については別の機会に譲りたい。同37年、開成学園「父母と教師の会」会長。同38年、青森県より文化功労者として表彰される。同43年、著書『少年倶楽部時代』を刊行。昭和50年6月30日午後3時10分、都内病院で死去、享年79歳であった。

Ⅱ．空前絶後の感動

富田尋常小学校（昭和4年廃校）時代ことである。代用教員、師範学校二部の経験から、加藤謙一は教育の楽しさや重要性を自覚するようになる。今度の学校は正教員で、しかも訓導の職である。加藤先生は張り切っていた。しかも大正6年のころの青森県の教員は、本来ならば4年に1回の昇給だが、加藤先生は1年で給料が上がり、青森県の教育界を驚かしたという。そのような特別昇給を受けたのは、校長をはじめとする学校関係者から破格の厚遇を得ていたからだ。青森師範を首席で卒業したという実力もあった。ともかくも順風満帆の教師生活であった。

加藤先生は国語の教育を重視し、自らガリ版刷りで学級雑誌「なかよし」を発行するなど精力的な指導者だった。そこに掲載した童話や物語が、子どもたちから大変喜ばれた。そのことに力を得て、夏休みの当直を全部引き受けて毎日ガリ版を刷り続け、学期明けには特大号を出すという張り切りぶりであった。子どもたちの喜びが目に浮かぶようだ。加藤先生も充実感に満ちていた。

ところが、加藤先生は、子どもたちのこの喜びを、自分のクラスだけではなく、なんとかして全国の子どもたちにも伝えたい、と願うようになる。そういう思いが日増しに強くなっていく。しかし、家族の生活はすべて自分の双肩にかかっている現実があり、また、校長や上司の恩にも応えなければならない事情もあった。だが、全国の子どもたちに夢を与えたいという断ちがたい思いに、ついに上京の決意を固める。1年間だけの教員生活だった。

全校集会で、校長が加藤先生が辞職する旨を語ったあと、加藤謙一は登壇した。

――校長の思いがけぬ公表に、すでにショックだった子供たちは、私が登壇して、まだ何も言わぬうちに、まず担任の子供たちが、ワーッと泣きだしてしまった。

すると隣の一・二年生も泣きだした。

もちろん、これは何の意味でなぜ泣かねばならぬのか分らんことと思うのだが、貰い泣きというのでしょう、五・六年生も一緒に泣きだした。

子供たちは全員大声で泣く、私も壇上で「このたびは……」と言ったきり後は言葉にならず絶句してともに泣き崩れるという情景で、私は今もって人生であれほど感動したことはない、空前絶後の感動だった。

この感動は、学校の先生だからこそのことで、その時改めて子供の純真さや先生のありがたさや、教育の大事さをつくづく思いかみしめたものです[3)]。……

Ⅲ．加藤謙一の上京

教え子たちと「空前絶後の感動」的な別れをして、加藤謙一先生は上京した。しかしながら、現実は非常に厳しいものであった。上京してどこかの出版社で働いて、全国の子どもたちに夢をという謙一の願いは、そう簡単に実現するものではなかった。ほとんどの出版社から、大学卒でないから、という理由で断られたため、仕方なく代用教員を3年間も務めなければならない状況に追い込まれた。これでは、なんのために教え子たちと泣きの別れまでして、上京したのか。謙一はすっかり自信を失ってしまった。

その苦境を支え、励ましたのが、高等小学校時代からの親友、宇野親美だった。その友情は、終生続いたことはいうまでもない。それどころか、謙一はのちに宇野の妹と結婚するのである。つまり親友であり、義理の兄弟でもあったのだ。したがって二人だけの絆だけではなく、家族ぐるみの深いつながりを築くのである。

謙一が失意のなかで悶々としていたとき、宇野が朗報を持ってきた。大学卒でなくても採用する出版社がある、というのだ。それが大日本雄弁会講談社（のちの講談社）だった。謙一はここでも必死だった。「なぜ小学校教師をやめて雑誌記者たらんとするか」の作文を3日以内に提出せよ、それがよかったら採用する、との講談社側の要求に、寝食を忘れて、3日3晩、命がけでその宿題に取り組んだというのだ。そして、1週間後「出社せよ」との返事がきた。「その嬉しさはそれこそ天に昇るとも、欣喜雀躍とも手の舞い足の踏むところを知らずとも、何ともまったく言いようはなく、宇野君と二人、手をとりあって嬉し泣きというところであった」[3)]と語る。

Ⅳ．佐藤紅緑の略歴と夏目漱石の評価

ここで、佐藤紅緑の略年譜を記しておく。なお、紅緑というのは俳号で、正岡子規が命名したものである。本名は洽六。正岡子規は紅緑に俳句を指導したばかりか、紅緑の俳句の才能を高く評価し、紅緑もまた子規を師として終生尊敬して止まなかった。

治六は、1874（明治7）年7月6日、青森県第三大区第一小区（現弘前市）親方町28番地に、父弥六、母しなの次男として生まれる。同13年、朝陽尋常小学校に入学する。23年、東奥義塾を中退し、青森県尋常中学校（現弘前高等学校）へ入学。26年、同校を中退し、上京後ただちに陸羯南の玄関番となり、翌年から俳句を子規から学ぶ。39年、脚本「侠艶録」が大好評。11回も映画化される。以後、大衆小説の第一人者として名を残す。佐藤紅緑の原作が、じつに71本も映画化されるという人気ぶりであった。

昭和2年5月、「少年倶楽部」に「あゝ玉杯に花うけて」の連載を開始し、以後、15年まで講談社の各種雑誌に作品を発表する。昭和24年6月3日、午前7時30分、自宅で永眠する。享年75歳であった。

ところで、明治39年に紅緑は「中央公論」に自然主義的傾向の強い小説「あん火」を発表し、夏目漱石から注目された。周知のとおり、正岡子規と夏目漱石は同じ年の生まれで親友でもあった。

漱石は森田草平に、明治39年11月6日の日付で手紙を出しているが、それには「アンクワを読んださうだが僕もよんだ。通篇西洋臭い。君どう思ふ。あれは焼き直しぢやないか。然し田園の光景が面白かつた。夫から田舎言葉のせゐか厭味がなくよまれた。僕は初めての小説をかいてあれ丈出来れば大成功の方と思ふ」[4] とある。つまり、漱石は紅緑の作品を絶賛したのである。いまは、詳しく触れることはできないが、この小説は、弘前市の郊外にある樹木という部落を舞台に展開する。漱石がいうように「津軽弁」がふんだんに出てきて、地元の読者にとっては身近に感ずる小説に仕上がっている。

のちに触れるが「佐藤紅緑論」を執筆した千葉寿夫先生も、この自然主義風の一連の作品群を評して「紅緑がこの種の作品を発表し続けていたら、一人の自然主義作家として、いわゆる純文学作家として日本文学史に名をとどめたでしょう」と、漱石同様の評価を下している。

なお、夏目漱石と紅緑は知己の間柄であったという。漱石の高浜虚子あて（明治41年8月19日付）の手紙には「昨紅緑来訪、久し振りに候。絽縮緬の羽織に絽の襦袢をつけ候。なかなか座付作者然としたる容子に候いし、大兄を訪う由、申居候参りしや」[4] とあり、夏目漱石、高浜虚子と紅緑が親交を持っていたことがわかる。それにしても、このころの紅緑の羽振りのよさは相当のものであったようだ。漱石がそういっているのだ。

さきに触れたように、明治39年は、紅緑にとって飛躍の年であった。10月、最初の脚本「侠艶録」が本郷座で上演され大当たりとなる。勢いを得た紅緑は次々と脚本を書き、一躍新派の人気劇作家となったのである。41年ごろ、秋田雨雀の紹介で福士幸次郎が紅緑の書生となる。以後、二人は生涯にわたってその深い絆で結ばれることになる。43年に「東京毎日新聞」に連載した「地上」あたりから大衆小説に転じた紅緑は、量産態勢に入る。

大正3年の「鳩の家」は浅虫温泉が舞台だ。太宰治が「思ひ出」のなかで「『鳩の家』は私がなんべん繰り返して読んでも必ず涙の出る長篇小説」だと、その感動ぶりを伝えている作品だ。その姉妹編が、翌年の「虎公」である。また、大正10年に「東京毎夕新聞」へ連載した「大盗伝」は、新聞の発行部数を16万から倍増の32万部まで伸ばしたという。

驚くべきことは、紅緑の劇作、小説が映画化された数が70本[5] を超えるということだ。これは石坂洋次郎の約80本に匹敵する驚異的な数字である。紅緑は少年小説を書く以前に、流行作家としても地位を確立していたのである。

Ⅴ．運命的な出会い

小稿の主たる標的である編集長と作家の交友関係について触れる。すなわち「少年倶楽部」の5代目編集長・加藤謙一と作家・佐藤紅緑との、いうならば〈運命的な出会い〉のことだ。大正から昭和の初めごろにかけて、飛ぶ鳥を落とす勢いの大ヒット作を連発していた紅緑に、加藤編集長が原稿依頼のため、兵庫県鳴尾村西畑の紅緑の自宅を訪問する。加藤謙一は『佐藤紅緑全集　下巻』所収の「“玉杯” 覚えがき」[6] で次のように述べている。少し長くなるがそのまま引用する。

――私の父は若いころ、郷里の新聞社で、一時紅緑先生と席をならべていたことがあるときいていたので、そんな縁からも大正十年入社早々お訪ねして敬意を表すべきだったが、社内の先輩たちがよほど懲りたことがあると見えて「紅緑はおっかないぞ」とおどかすものだから、そんなこわい人は後まわしだと敬遠しているうちに四、五年すぎてしまった。その間に先生の小説をいくつか読んだところ、この人に少年小説を書いてもらったらきっといいものができるにちがいない。虎穴に入らずんば虎児を得ず、おっかないのこわいのといっていられない、何が何でもこの先生に書いてもらわねばという止みがたい気持になって、そのころ大阪に居られた先生のところへ出かけた。新幹線があるわけでなし、当時大阪までというのは大奮発の出張だった。

はじめて会った先生は、おやじのこともあるので、久しぶりの甥にでも会ったようにやさしかったが、「ところで先生、少年倶楽部に少年小説を書いていただきたいのですが」と切り出したトタン、疾風迅雷あっというまもなく私の頭上にその迅雷が落ちた。……

紅緑は訪問してきた謙一に、顔面を紅潮させて「な

にッ、このおれにハナ垂れっ子の読む小説を書けというのか」と怒鳴ったのである。謙一は、いきなり怒鳴られて、二の句が継げなかった。紅緑は「この無礼者奴が、といわんばかりに私をにらみつけた。なるほどこわい先生だと一瞬ひるんだが、ここまで来てこのまま引き下がる手はないと、やっと踏み止まったというのだ。

そして、必死に食い下がって、いった。「子どもの小説を書くようにということは、そんなに立腹されるほど失礼なことですか」[6] と聞くと、「おとなのものを書いてきたが、子どもだましの程度の低いものが書けるか、見損なうな」と、紅緑は怒りを加速した。

Ⅵ. 必死の説得

加藤謙一も必死である。「先生はハナたれ小僧といわれるが、子どもは国の宝ですぞ、ハナたれ小僧がよくならないと日本の国はよくならないのです」[7] と応戦した。「これは野間初代社長の口ぐせの受け売りだったが、図らずもその受け売りで大紅緑を向うにまわし説教するという妙な場面になった」[6] と謙一はのちに苦笑するのだが、そのときは真剣そのものであった。加藤謙一編集長は、なんとしても紅緑を説得しなければならない。意を決して「なんとかしていい小説を載せたいと思うが、おとなの恋愛小説を書く人はいても、子どものため熱をこめて書く人は見当たらない。先生の小説を読んで、この先生なら、と思ったのに、これではお話になりますまい」[8] といったのである。すると紅緑は「まあ、待て」といってこういったという

――「いなかで教員をやったそうだが代用教員か」という。「初めは藤代の三省小学校に1年代用で月給が9円で、めしも食えんので、師範の二部にはいりました。富田小学校の訓導をやって、その時、雑誌も出しました。東京へあてなく出て、すぐ雑誌社へはいれないので、教員をやりました。正教員の免状があるのに、代用教員でした」と答えると、「教員免許状は全国共通ではないのか、けしからん」と、それから紅緑の怒りは、そっちの方へ向ってしまった。そして少年小説のことを「よし、わかった。考えておこう」ということになった[8]。……

一時カッとなった先生も、必死にすがりつくのが少し気の毒になったのか、私の少年倶楽部に対する情熱のようなものや、少年雑誌を編集する特別の苦心のようなものに耳をかたむけているうちにだんだんわかってきたらしく「よし、わかった。考えておこう」といったのではないか、謙一はそう推量したのである。紅緑が、カッとなって怒鳴るのはいつものことで、そのエピソードは、それこそ枚挙にいとまがないほどだ。しかし、謙一の切り返しもすごい。

謙一が紅緑に必死に食い下がったのは、むろん、紅緑に少年小説を書いてもらいたかったからだが、もう一つ理由が考えられる。それは「少年倶楽部」の売り上げが急減したことも大きな要因だ。しかし、それだけではなかった。じつは、紅緑への懇願はそれ以上に、謙一自身のそれまでの生き方と深く結び付いていたのである。

どういうことか。謙一が弘前市内での教員の職を捨ててまで上京したのは、全国の子どもたちに本を読む楽しさと喜びを与えたい、という大きな夢があったからだ。この夢の実現のために、謙一は、さまざまな苦しみに耐えてきたのだ。そのことだけは頭から怒鳴られたけれども、紅緑にはぜひともいっておかなければならない、そう思ったのではないか。

――上京前、弘前で先生をしていたが、子どもに東京から出ている雑誌を買い与えても、喜んでもらえない。あまりに都会的でハイカラで、ぴったりしないらしい。「なかよし」というガリ版の雑誌を、彼らといっしょにつくったところ、すみからすみまでぴったりで、これこそ自分たちの雑誌だ、と喜んでくれた。その雑誌は、四、五十人にしか与えられない。教育者が雑誌を作り、全国の子どもに与えなければと思った。

そこで教え子たちに泣いて別れて上京、雑誌社を捜したが、いなか教員を雇ってくれるところは、簡単には見つからなかった。講談社の野間社長に拾われ、一ヵ月半で「少年倶楽部」編集長にしてくれた[8]。……

Ⅶ. 紅緑が直接電話で

紅緑が心を動かしたのは、謙一の「教え子たちに泣いて別れて上京」したということばによるのではないか、そう推量したくなるほど、加藤謙一先生がその教え子たちと泣いて別れたシーンは、胸を打つのだ。紅緑もまた情に厚い作家である。謙一の説得が功を奏したようだ。このとき紅緑の腹は、拒絶から「考えておこう」に微妙に変化したのである。それにしても、加藤編集著と紅緑の、この〈初対面の対決〉はまことに迫力があり、まるですぐれた小説を読んでいるような感慨を抱くには、当方だけだろうか。これはまさしくドラマではないか。しかし、これで結着がついたわけではなかった。幕はまだ下りていない。

――この「考えておこう」といってくれた一言を虎穴からの獲物として意気揚々帰ってきたが、よく考えてみると、「それじゃ書いてやろう」といってくれたのではない。あれほど熱心にすがりついたのを無下に帰すのもと思って気休めをいってくれたのかも知れない……。そう思うと、当てにしていいのやら、あきらめなければならないのやら、何とも複雑な気持でいたところ、数日

たってから長距離電話がかかってきた。先生が直接電話に出られて、「題はきまった。“あゝ玉杯に花うけて”だ」といっただけで、ガチャン。いつ書くとも何枚になる予定だともいわれなかったが、題がきまったというからには、真実書いて下さる気になられたのだ……。私は受話器をおいて呆然とした。あまりに嬉しいときはこんなものである。入社以来かれこれ五十年に近い今日まで、あのときのような感動が強すぎて夢のような気持になったことは先ず無い[6]。……

この場面もまたドラマティックである。紅緑の電話は、日本の児童文学史を塗り替えた、その瞬間であった。むろん、加藤謙一が名編集長との称号を得ることになる瞬間でもある。

劇作家としても名を成し、自然主義作家として文壇や世間に物議を醸したこともあった紅緑は、「大正から昭和の初めにかけて、すさまじい勢いで新聞や雑誌に長編小説を書き、大衆小説を書かせれば当代人気随一」[5]の作家と呼ばれ、その地位を確立していたのである。

紅緑は、すでに講談社の「婦人倶楽部」や「講談倶楽部」に寄稿していた。いま「少年倶楽部」に掲載すれば、講談社としてはまことに強力な布陣を構えることにもなる、謙一はそう考えていたはずだ。なぜなら、謙一は「紅緑が洋行から帰ったころ紅緑の小説を読み感動した。そしてこの先生に『少年倶楽部』に書いてもらえば、必ず少年たちは熱狂すると」[8]思っていたからである。

謙一の予想が的中した。「あゝ玉杯に花うけて」の連載が始まってからの反響がすごかった。読者は熱狂し、おもしろい、ためになる、こんな小説は初めてだという賛辞が届き、それが山をなしたという。親や先生からもこんな小説が欲しかった、見上げたものだという投書がきたというのだ。

加藤謙一の夢――。その長年の夢が、佐藤紅緑の一作目によって実現したのだ。

それだけではなかった。この「あゝ玉杯に花うけて」の一回分の原稿を読んで、おそらく、謙一は衝撃を受けたのではないか。なぜなら、主人公の青木千三の貧しい境遇、その青木に温かい友情を注ぐ学友の柳光一。これは、まるで自分と親友の宇野親美との関係とそっくりではないか、謙一はそう考えたはずだからだ。

それゆえ、加藤編集長は自らその「あゝ玉杯に花うけて」の次号予告の筆を執ったのである。つまり「少年倶楽部」四月号に「満天下の少年が熱読すべき立志小説――『あゝ玉杯に花うけて』――本誌五月号より連載――」という、大きな活字の見出しで「文壇の大家佐藤紅緑先生が、前途ある天下の少年に対する、燃えるような熱情から、心血をそゝいで執筆された一代の大傑作！　少年という少年が、一読発奮、終生忘れることの出来ないような強い感動をのこすもの、曽て見ることの出来なかった大立志小説、希望に向かって進まるゝ少年諸君の道程をてらす光明として熱読すべきはこれである」と。加藤編集長の高揚感がにじみ出ている文章ではないか。

Ⅷ. 紅緑作品の評価

直木賞作家の今官一が「佐藤紅緑研究」の第一人者だと呼んでいる人が、弘前市出身の藤田清美である。藤田は「少年倶楽部は、昭和二年一月号が三十万部、そして『あゝ玉杯に花うけて』連載中の三年一月号は、対前年比五〇％増の四十五万部」に跳ね上がり、そして、加藤謙一編集長を「少年倶楽部を引きうけて七年目で日本一の宿願を果たしたことになる」[9]と報告している。

藤田清美のこの連載記事は、今官一がいうようにじつに詳細を極め、紅緑は昭和15年に筆を絶つが、その13年間に「少年倶楽部」に発表した作品が39点を超えるというのだ。しかも紅緑は、この間、講談社以外の出版社にはいっさい発表しなかったという。藤田は「ともかく紅緑作品は、日本人の魂がこもった作品で、少年たちが一人残らず奮い立たずにはおれない、といわれ、明確な理想主義は、往時の少年たちに大きな影響を与えた、といわれる」とも述べている。

佐藤紅緑の少年小説は児童文学史上、画期的な出来事であり、少年小説の金字塔を打ち立てたと評され、圧倒的な支持を得たことはすでに触れた。藤田は「それまでの少年小説にありがちだった童話的で生ぬるい、手ごたえのない読み物にならされていた子供たちや、その父兄、先生などに広く歓迎をうけ、支持されるところとなった」と分析している。

「あゝ玉杯に花うけて」の主人公である貧しい少年チビ公こと、青木千三が刻苦勉励して、天下の秀才を集めた第一高等学校へ入学するまでの物語の展開に、全国の少年たちは興奮し、紅緑を「紅緑先生」と呼んで深い尊敬の念を表わした、とも伝えられている。

当時、小学校５年生だった弘前市の千葉寿夫少年も、感動に胸を躍らせた一人であった。千葉寿夫先生は著名な教育者であり、また教育史家、演劇家、近現代郷土史家など、多岐にわたる分野でも活躍し、すぐれた業績を残している。わけても、作家の武者小路実篤、安岡章太郎とも親交を持つ文学者としても広く知られているところである。

いささか私事にわたるが、個人的にも計り知れないほど多くの教示と薫陶をいただいている。たとえば、平成15年８月19日のことと記憶しているが、当時、弘前ペンクラブ顧問の千葉寿夫から誘われて、作家の安岡章太郎とお嬢さんの治子さん（東京大学大学院総合文化研究

科助教授　当時）と、工藤正廣北海道大学名誉教授とともに、終日、十和田湖や奥入瀬渓流を散策し、さらに、夜は、また、杯を交わしながら歓談するという、まことに得がたい思い出をいただいたことも、その恩恵のひとつだ。景仰してやまない、故千葉寿夫顧問の〈佐藤紅緑論〉を借用したい。

Ⅸ．千葉寿夫の「佐藤紅緑論」

千葉寿夫は、『郷土の先人を語る（3）』所収の「佐藤紅緑」[10] の冒頭に「少年時代に読んだ本の感銘は、一生抜けないものであります。わたしは小学校五年生当時、弘前図書館で読んだ佐藤紅緑の少年小説「少年讃歌」の感銘と感激を今もって忘れることができません」と記した。千葉少年の感動の深さが読み取れる一節だ。さらにこうもいう。

――今日でもなお、わたしの中には紅緑から影響された単純素朴な正義感が根強く残っていて、思わぬときにそれを自覚して驚くことがありますが、紅緑が少年達に説いた正義は、それほどまでに当時の少年達にアッピールしたものでした。現在四十歳以上五十歳ぐらいの人達の中には、わたし同様、紅緑から受けた正義感を、ずっと燃やし続けている人が多いと思います。満天下の少年達を文字通り熱狂させた少年小説作家は、おそらく紅緑をもって空前絶後とするでしょう。……

紅緑の「少年讃歌」は、一作目「あゝ玉杯に花うけて」、二作目「紅顔美談」に次ぐ三作目の小説である。千葉は「紅緑の『少年讃歌』は、弘前中学の生徒が主人公であります。浅岡享二は秀才、梶原十介は腕力が強く無類の正義漢、そして舞台となっているのは弘前であります。もっとも後半になると舞台は東京に移るのでありますが、自分の住んでいる弘前が、小説の中に存在していた、ということが、少年のわたしにとって大きな驚きであり、また心からなる誇りでありました」と述べ、作品が弘前を舞台としていることに驚きと誇りを感じたというのだ。また、この作品の冒頭近くに、岩木山を描写しているところがある。一部、ルビを省いて引用する。

――ふたりは坂の上に出た。坂の下はいわゆる下町で、ここから一望千里、津軽平野のかなたにすっくりと白衣（びゃくい）を着た岩木山が立っている、昔からこれを津軽富士と称している、あたりには山がなく目路（めじ）のかぎりの地平線にただ一つ三尖（せん）の頭を半空にそびやかしているこの山はこの土地の唯一の誇りである。……

太宰治が名作「津軽」のなかで描出した、岩木山もすばらしいが、紅緑の風景描写も抜群であると思う。描写された風景が、そのまま目に浮かんでくるからだ。この場面を読んだ少年たち、わけても弘前に住む少年たちは身が震えるような感動を覚えたのではないだろうか。「少年讃歌」について「わたしは『少年讃歌』を熱読したあげく、友達どうしで「浅岡」「梶原」などと、小説中の主人公の名で呼び合い、紅緑の正義に我を忘れたものであります」とも千葉寿夫は述べている。

佐藤紅緑は、「少年小説の金字塔を打ち立てた」と絶賛されていることはすでに述べた。とすれば、同じ弘前出身の大ジャーナリストの陸羯南が「明治言論界の巨星」「明治時代きっての偉材」「不世出の大先人」と称賛された例に倣っていえば、佐藤紅緑は「空前絶後の少年小説作家」という称号が千葉寿夫によって命名されたと、声を大にしていわなければならない。

紅緑の「少年讃歌」は、千葉をはじめ、故郷の人たちが圧倒的に支持した作品である。岩木山だけではなく、大円寺の五重塔も出てくるのだから、千葉寿夫が「少年のわたしにとって大きな驚きであり、また心からなる誇りでありました」と思ったことは容易に理解できる。

千葉寿夫の紅緑に対する評価はじつに高い。少年小説はもちろん、劇作家、自然主義作家としても、つまり、紅緑の多彩な全仕事を踏まえたうえで、文学者としての存在そのものの大きさを評価しているのだ。だから千葉寿夫はこうもいうのだ。

――紅緑は生前の華麗な活躍に比べて、晩年から死後にかけて、不当に不遇な取り扱いを受けた作家といわねばなりません。紅緑の少年小説に多大な影響を受けたわたしとしては、このことに対して義憤めいた怒りさえ感ずるのであります[10]。……

それだけではすまないようだ。千葉は腹に据えかねて、「わたしは只、紅緑が日本文学史上で過小に評価されている事実が憤慨に堪えないのであります」と、まるで紅緑が怒りを爆発させるかのように、千葉寿夫も激怒するのである。やはり紅緑の影響力は群を抜いていた、というほかない。

Ⅹ．全国の少年たちが熱狂する

それにしても、昭和２年５月以降の「少年倶楽部」に掲載された、一連の佐藤紅緑の少年小説に、いかに全国の少年たちが熱狂し感動したかが、いまの千葉寿夫の話から容易に想像できる。『佐藤紅緑全集　上巻』の「あゝ玉杯に花うけて」の囲み記事の欄には、こうもある。

編集部が「佐藤紅緑先生が少年諸君の為に御執筆下さるこの『あゝ玉杯に花うけて』に就いては愛読者諸君から熱烈な讃嘆の手紙が寄せられます」と述べ、その手紙を紹介している。

――記者様、感謝します。新年号は何と云っても日本一の出来です。「あゝ玉杯に花うけて」は何と云う、ま

あ良い作でしょう。貧に泣き、失望も起こし、苦しみもして、希望を起こし、感謝して一心勉強する心、臍の力、読者自ら奮起する、僕には心の薬であります。……

「少年倶楽部」に胸を躍らせている少年たちの姿が目に浮かぶようだ。その感激をリアルタイムで実感していた当時の少年たちは、まことに幸せであったと強くそう思う。千葉寿夫の見解はこうだ。

――特に少年少女小説の世界では正義を説き、自分のヒューマニズムを持ち、人間的だった。あれほど日本中の少年少女を熱狂させ感動させた作家はいない、空前絶後といってよい。子供の描き方は、大人並みに扱い、子供だからと妥協しなかった。また小説の主人公を地方にとり、地方人の劣等感を拭いとってくれた。東京と地方の落差の激しい時代で、東京者が地方人を笑ったのは言葉だった。三十年位前まで集団就職で上京し、地方訛りを笑われ自殺をした者が毎年あった。今は方言を持ち上げる向きもあるが、それはゆとりのある者の言うことで、そういう意味では私は方言詩は好まなかった。人間、言葉を嘲られるほど辛いことはない。紅緑は作品で方言の問題を扱い、喧嘩は、主人公が素手で相手をやっつけ、地方少年の劣等感を拭い、溜飲を下げてくれた。正義が必ず勝つことも小説の中で実証した[11]。……

Ⅺ. 紅緑と謙一の志が後世へ

紅緑があの世に旅立ってから19年後のことである。紅緑に少年小説を書かせた加藤謙一編集長の話を紹介したい。加藤謙一が「編集生活五十年　子供たちとともに」のタイトルで、昭和43年に、青森県校長会で特別講演をしている。その記録から引用する。

――オールド・ファンの一例をお話しますと、横浜に某という医者がおるのですが、その人の申すには「自分は少年時代に少年倶楽部を買うのに親から五十銭を貰えなかった。昔は五十銭の小遣いが普通当たり前のことではなかった時代だったが、あまりにほしくて新聞配達のアルバイトをしてようやく買うことができた。そしてそこまで苦労して読んだ雑誌は自分の人間形成に大変役立った。紅緑の「ああ玉杯に花うけて」とそれに続く作品の数々、揺籃期の幼き魂の形成をこれらの名作にどんなにお世話になったか計りしれない気がする。自分はあの作中の人物になりきって読み、学び、やっと一町医者になることができた。有り難う」と言う。

少年期の人間形成に役立ったというオールド・ファンの感慨はみんな同じなのです。

さてその人の続き話になりますが、その人には倅があり、これが大学受験を三度すべったという。

何とか父の跡継ぎをと医大を受けさせたが三度の失敗というので、奥さんが見かねて、「いつまでも浪人というのでは可哀相ではないか。多少の寄付で入れてくれる学校もあると聞くし、うちはその寄付ができないというわけでもない。私は母として見かねるので、ぜひそうして欲しい」と言ったのだそうです。

それに対してこのご主人がなんと言ったかというと「バカいうな、おれは紅緑先生にそんなことは教わっておらん、倅がんばれ」ということで、お蔭様で裏口入学でなく合格し、いまは京都医大で勉強しているという。

これはまったく親子二代の少倶精神、紅緑精神で貫いた典型である。

この話を聞いて私は涙が出てしょうがなかった。……

加藤謙一の話は、紅緑の精神がのちの世代にまで、確かに引き継がれていたということの証左となろう。つまり、紅緑と加藤謙一編集長の志が現代においても息づいているということだ。

ところで、紅緑の末娘の佐藤愛子に、原稿用紙にしてじつに3400枚という超大作『血脈（全三巻）』[12] がある。晩年の紅緑が一人で散歩をして、東大の赤門前を歩いていたときの光景だ。

――赤門前を歩いていると、向うからくたびれた兵隊ズボンに黒い詰襟の上着を着た青年が近づいて来た。すれ違おうとして立ち止り、青年は声をかけた。

「失礼ですが、佐藤紅緑先生ではありませんか？」

「そうですが」

治六がいうと青年の目は一瞬大きく見開かれて、いった。

「ぼくは少年時代、先生の『あゝ玉杯に花うけて』や『英雄行進曲』を五回も六回もくり返して読みました。辛いことがあるとあの小説を思って発奮しました。それで、ぼくはいつか一度先生にお会いしてお礼をいいたいと思っていたのです」

「やあ、そうですか、やあ……」

思わず治六は破願した。

「日本は戦争に負けたが、これからの日本は君たちの肩に懸っている。どうか君たちの力で国を再建して下さい」

「はい。頑張ります、有難うございました……」

そう答えて一礼して立ち去って行く青年の姿を彼はいつまでも見送っていた[12]。……

その青年と会ってから「数日の間、治六は幸福だった」と佐藤愛子は付している。

Ⅻ. むすびに

大正時代末期に、ともに弘前出身で、弘前中学の先輩・後輩の関係でもある編集者と作家が出会う。その出会いは刺激的であり、ドラマティックでもあった。しかしな

がら、その出会いの後の二人の活躍と隆盛ぶりを眺めるとき、やはりその出会いは〈運命的な出会い〉であった、というほかない。

青年教師だった加藤謙一は学級雑誌「なかよし」を自らの手で発行し、子どもたちの喜ぶ姿に教師としての夢を膨らませた。さらにその夢を全国の子どもたちへ広げようと、上京を決意する。この決意が佐藤紅緑との出会いの遠因となったといえよう。その意味において学級雑誌「なかよし」が持つ意味は、けっして小さくはない。なぜなら、上京の契機となったのが、その「なかよし」だったからである。

紅緑が、加藤謙一の説得に応じるまでには時間がかかったことは納得できる。大人のための小説を書いて安定した評価を得ていたこともあるが、紅緑はそのとき、もう53歳であったのだ。いわば老境に入っていた紅緑に逡巡があったとしてもおかしくはない。ためらいがあったことは、むしろ当然だったと思う。だが、加藤編集長の「子どもは国の宝ですぞ、子どもがよくならなければ日本の国はよくならない」ということばが、紅緑を動かしたことはたしかだ。

なぜならば、そのことばは紅緑が師として尊敬して止まない、郷土の誇りとする陸羯南の訓戒でもあったからだ。かつて、陸羯南は紅緑に「文学者になるのも可いが、日本には大きな事が眼前に迫って居る、国家経綸の事が」[13] といったというのだ。むろん、紅緑は羯南のそのことばを忘れてはいない。だから「私は『道』ための小説以外には書いた事もなければこれからも書かうとしない、これは先生が私に給はつた霊魂だからである」と佐藤紅緑はいうのだ。

二人の〈運命的な出会い〉には、弘前が輩出した偉大なジャーナリスト、陸羯南の存在があったからかもしれない。紅緑がいかに羯南を尊敬していたかは、末娘の佐藤愛子の「羯南のことを話すときは居ずまいを正して目に涙を浮かべた」[14] の一節からもただちに読み解くことができる。

なお、佐藤紅緑は生前、自分が死んだら「真っ先に加藤に知らせ、葬式の世話をしてもらうように」とノートに認めてあったという。加藤謙一は「こんなにまで、かわいがってくれたのかと、感動した」と講演のなかで述べている。

（受理日　平成27年2月16日）

参考文献

1）加藤文夫講演録「記念碑の建立に寄せて　父　加藤謙一を語る」（平成22年9月）
2）加藤丈夫『「漫画少年」物語　編集者・加藤謙一伝』（2002年12月16日　都市出版刊）
3）加藤謙一講演録「編集生活五十年　子供たちとともに」（昭和43年10月18日開催の「青森県校長会」特別講演録）
4）『夏目漱石全集第25巻』（昭和44年　日本メール・オーダー刊）
5）青森県近代文学館編「佐藤紅緑没後50年特別展　花はくれない」（図録　平成11年7月23日）
6）加藤謙一「“玉杯”覚えがき」（『佐藤紅緑全集　下巻　少年倶楽部名作』（昭和42年　講談社刊）所収
7）加藤謙一『少年倶楽部時代』（昭和43年9月28日　講談社刊
8）加藤謙一講演録「佐藤紅緑先生について」（弘前図書館報「はと笛」60　昭和41年7月1日）
9）藤田清美「紅緑と少年小説」（東奥日報　昭和49年5月7日付～6月6日付）11回連載
10）千葉寿夫『郷土の先人を語る(3)』（1969年　弘前市立弘前図書館発行）
11）「弘前ペンクラブニュース」第29号（平成17年3月15日付）
12）佐藤愛子『血脈（全三巻）』（2001年　文藝春秋社刊）
13）佐藤紅緑「陸羯南先生銘肝私記」（昭和4年　「日本及日本人」第184号　政教社発行）
14）佐藤愛子『花はくれない　小説佐藤紅緑』（昭和42年12月12日　講談社刊）

Fateful Encounter of Kenichi Kato, editor-n-chief of "Shonen Club" and poplar writer Koroku Sato

Michimasa Saito [1)]

1) **Department of Nursing, School of Health Science, Hirosaki University of Health and welfare, 3-18-1 Sanpinai, Hirosaki 036-8102, Japan**

Summary

When Kenichi Kato, who was a young teacher at Tomita Jinjo Elementary School, published the class magazine "Nakayoshi" written with his own hands, children were extremely pleased. This rejoicing figure of children strengthened his mind and he started pursuing the dream of happiness for children all over Japan without restricting to children of his own class. Therefore, he decided to join a publishing company and came to Tokyo. This decision became the remote cause of <fateful encounter> with Koroku Sato. However, despite of separating from the children with a very heavy heart, harsh reality was waiting for him for the realization of his dreams. With great difficulties, Kenichi Kato could finally join Kodansha. Later he would become a highly regarded editor-in-chief of the magazine called "Shonen Club".

On the other hand, in the late Meiji period, Koroku Sato attracted a lot of attention from the literary world because of his novels and screenplays, and he established himself as a popular writer in the Taisho period. Kenichi Kato and Koroku Sato would meet in the late Taisho era. Both of them were originally from Hirosaki, and Kenichi's father and Koroku were acquaintance. Therefore, Kato requested Koroku to write a manuscript for "Shonen Club". However, Koroku got very furious. However, the desperate persuasion of Koroku paid off and Koroku's manuscript finally arrived. Encounter of these two people has a major impact on the Japanese magazine industry. In other words, from the May 1927 issue of "Shonen Club", as soon as Koroku started the series of "Aa Gyokuhai Ni Hana Ukete", it instantly become a sensational hit among boys all over the country. It was highly acclaimed by teachers as well as parents. While this series was published in "Shonen Club", its circulation jumped from 300,000 to 450,000 copies. Koroku Sato took the work by storm with his novel for young boys, and he say a new milestone in the world of children's literature.

Key words: Dream, Encounter, Shonen Club